

ミシュレと現代歴史学

立 川 孝 一

ミシュレと現代歴史学

立 川 孝 一

本稿では、ミシュレに代表されるロマン主義的な歴史学と、その後のいわゆる実証主義的な歴史学との関係については特に論じない。両者の対立——主観性と客観性、想像力と科学的分析——はあまりに明白であるために、議論は図式化してしまうからである。むしろ実証主義を批判することで出発した「新しい歴史学」——アナル学派——とミシュレとの親和性を検証することからはじめ、次にフランス革命や記憶の歴史との関わりを見たのちに、ミシュレの現代性について考察したい。

1 アナル学派とミシュレ

(1) L・フェーヴル

第2次世界大戦——フランスにとっては4年間のドイツ占領という暗い屈辱の時代——が終わってまもない1946年に、『アナル』の創始者L・フェーヴルは叢書「自由の古典」の一冊として『ミシュレ』を出版している。約180頁の小冊子の半分はフェーヴルによる序文（「ミシュレあるいは精神の自由」）であり、残り半分がミシュレ自身のテキスト（大部分は『世界史序説』からの抜粋）である²。序文の冒頭は次のように皮肉な——あるいはむしろ諧謔的な——調子で始まっている。「ミシュレをご存じか？……彼のことなら知りすぎている！……時代遅れの老人で、おめでたい人道主義者、排他的愛国主義者……」「もう死んだ人間だというもよからう」（大野訳、p. 183）。

勿論、これはレトリックであって、アナル第3世代の歴史家ル・ゴフの言い方を借りるなら、意識の「表層」においては断絶していても、「深層」においては連続していることを知りつつ、フェーヴルは読者——「占領」を体験したフランス人——に向かって語りかけていく。彼はミシュレの『民衆』（1846）をとりあげて次のように言う。「100年後のわれわれ、1938年の、1940年の、1944年のわれわれフランス人は……同じ強烈さで、そうした戦慄を感じとる」。——100年前のフランスとは、ミシュレ（1798-1874）の前半生にあたるが、ナポレオンの没落（1815）にはじまり、王政復古（1815-30）を経て、7月王政（1830-48）へと至る半世紀のことである。フランスはそのあいだ、外国（主にイギリス）の支配に屈し、自由を忘れ、自らが「革命の子」であることを

否認してきた。だが今や自由を取り戻すべき時である。ミシュレは2月革命の予感の下で『フランス革命史』(1847-53)を書く。100年後、フェーヴルは、ドイツ占領下のコレージュ・ド・フランスで「ミシュレとルネサンス」について講義をする(1942-43)³。そして戦後の解放的な雰囲気の中で、今や誰はばかることなく、「フランス的な自由」について語るのだ。「自由への生き生きとした息づかい」「ミシュレは自由の古典的作家だ」「自由は存在するのではない、自由は作り出されるのだ」(大野訳)——だが、引用はこれくらいにしておこう。フェーヴルのミシュレ礼讃は、いわば彼らフランス国民が共有する「体験」——戦争体験——から生ずるもので、それを知らない「戦後世代」の心を打つとは限らない。より冷静になり、もっと知的な方面においてミシュレと現代をつなぐものを捜すべきであろう。フェーヴルはこの方面においてもさすがに博識であり、ミシュレの歴史学が「新しい歴史学」にとっての良きモデルであると、幾度も力説している。

(2) 新しい歴史学のモデルとしてのミシュレ

①地理学

歴史と地理の相互補完性を意識していたフェーヴルは『大地と人類の進化』の序論⁴において、ミシュレの「タブロー・ド・ラ・フランス」(「フランスの国土」1833)と1869年の序文⁵をとりあげてミシュレの歴史・地理観を高く評価しているが、それは地理が歴史の「土台」だからということだけではなく、ミシュレにおいては物質と精神とが不可分なものとして捉えられており、しかもそれが変化していく所に目が向けられているからである。つまり、地理と歴史、物質と精神の全体が問題なのであり、どちらか一方が他方を決定するのではない。歴史における決定論を拒否することにおいてミシュレとフェーヴルとは完全に一致していた。なお、「地理」「物質」への関心はF・ブローデルに受け継がれ、「長期持続」(longue durée)、「物質文明」という概念を生み出している(*La Méditerranée et le monde méditerranéen à l'époque de Philippe II*, 1949; *Civilisation matérielle et capitalisme*, 1967)。

②climat

「気候」もしくは「風土」と訳されることの多いこの言葉は、フェーヴルにおいては独特の使われ方をしており、アナル史学(社会史、心性史)においてはキーワードのひとつである。M・ヴォヴェル『フランス革命の心性』(原著1985、立川ほか訳、岩波書店、1992)においてもこの言葉が使用され、共訳者の「精神的風土」という訳を、立川があえて「時代の雰囲気」という訳に代えさせたことが想起される(「訳者あとがき」を参照)。その変更の理由としては、筆者が著者ヴォヴェルに直接尋ねたところ、それは不動のものではなく、変化しうるものであると説明してくれたためでもある。先にとりあげた地理にしても、このclimatにしても、物質的な決定

論とは別のものとして理解しなければならないのである。

L・フェーブルはエコール・ノルマルでおこなった講演において、次のように語っている。

ミシュレが1834年の講義で学生にこんなことを言っています。「歴史はスターンの小説と同じだ。サロンで起こっていたことは、台所でも起こっていた。二百里も離れたところで、一方が時を刻むと、他方は時を告げる、二個の感応時計のように。」そして次の例をつけ加えています。「アベラルの哲学が自由を告げると、時を同じくしてピカルディー地方の自治都市が自由を刻む。」実に見事に表現したものです。ついでに指摘しますとミシュレは、人間の様々な活動に位階制とか階級分類を設けたりしませんでした。第一層、第二層、第三層あるいは第一段、第二段、第三段といった石工の単純極まりない形而上学を抱いていません。……むしろ精妙にして賢明な「共通の雰囲気」(climat commun)という概念を持っていました。(長谷川輝夫 訳)⁶

「石工」の例は、マルクス主義的な史的唯物論——経済・政治・文化の垂直的な三層構造——を批判したものと思われるが、climatのもつ同時進行性は政治史的な因果関係論(年代主義)とも相容れない。アベラルと労働者のように身分の異なる人間が全く離れた所にいながらも、「自由」という同じ空気を吸っている。それは従来の政治史・文化史の方法では説明がつかないとフェーブルは考える。実はそこから「心性史」という概念・方法が生まれてくるのである。

③民衆の世界

20世紀後半のアナール学派(社会史)に至るまで、「民衆」が歴史の主役になることはまれで、歴史家の関心は「文明」(ヴォルテール)であったり、政治・外交・軍事(ランケ)であったりした。19世紀の後半になってマルクスの史的唯物論が被搾取階級としての農民にスポットライトをあてることになるとしても、それはあくまで「階級」としての農民であり、具体的な生活のレベルやその心性にまで掘り下げて観察されることはなかった。勿論、パリ生まれのミシュレが農民あるいは農村の住民と身近に接触していた訳ではない。彼が自らの体験と重ね合わせて語ることができたのは、都市の——とりわけパリの下町の——商人や職人についてであった(フランス革命下のパリのサンキュロットの分析については、1871年に焼失したパリ市庁舎の文書を『フランス革命史』が使用していることもあり、永遠にその価値を失わない)。だがミシュレはすでに『フランス史』(中世)を書き始める頃から、民俗学にも関心を示し、『ドイツ法古事誌』の著者であるヤーコプ・グリムに幾度も書簡を送っている(1829年以降)。『フランス史』の最初の2巻(1833年)はキリスト教への憧憬が前面に打ち出されているとされるが、それでも教会に集まって独自の振る舞い(祝祭——阿呆の祭りなど)に興ずる農民の姿が生き生きと描かれている(邦訳『フ

ランス史』Iの最終章「芸術の原理としての受難」を参照)。さらに1815年に亡くなった母コンスタンスの実家であるミレー家がロレーヌ地方(アンデルヌ県)の農民であったことも当然考慮に入れる必要がある。ジャンヌ・ダルクの生まれたドンレミ村もそこからそれほど隔たっていないのである。ピカルディーの都市ランからパリに出て来て印刷工になった父と、農民出身の母から生まれたミシュレの中には、民衆の二つの系譜——職人と農民——が入り混っていたのである。

ミシュレにおいて身近なものであった民衆の世界——勿論、現実においてというよりは、想像の中でというべきだが——は、フェーヴルにおいては全くの未知の世界、異文化の世界として提示される(もっともこれは彼独自の戦略でもあって、現在と過去、日常と歴史とが不連続であるという前提から彼は議論を進めるのだ)。

われわれ二十世紀のフランス人とは、そもそも何者であり、何であるのか?……基本的に都會人であり、定住民であり、洗練された人間である。

フランス十六世紀の具体的な人間、生きている人間、骨と肉を持った人間と、われわれ二十世紀のフランス人とは、ほとんど似たところがない。あの野人、あの放浪者、あの村人。彼は何とわれわれから遠いことか!⁷(二宮敬訳)

16世紀ルネサンスのフランスを、上から王侯貴族(宮廷社会)、芸術家、商人(ブルジョワ)へと下って来たフェーヴルは、最下層の民衆世界を前にして自らの知的能力の限界を告白する。歴史家にとって、それは永遠に闇の世界なのである(アナル第3世代に属するル・ゴフヤル・ロワ・ラデュリーも同様の発言をしている)。だが彼らにはミシュレという道案内がいた。

下を見れば、それは貧しい、遅れた、無知な憐れな下層民の群れ。人間と付き合うよりも動物に親近感を抱き、しばしば動物と同居して区別もつかないような人びと。苦しみ虐げられる人びとだ。忌み嫌われ、笑い嘲られ、何とも無器用で武骨な賤民たちだ。彼らもまた教会に属している。万人が教会に行くのだ。

それがどんなことかは、すでにミシュレが『フランス史』第7巻(ルネサンス)の「序説」の中で]語っている。野や森や曠野^{ランド}、妖精の宿る柏の木、あるいは夜、日の光を浴びて真珠のように輝く伝統的な蛇やドラゴンが水を飲み^{ランド}に現れる。冷たい泉……彼らの胸の奥底には、とうに消滅したと思われていたさまざまな信仰の血脈、密かな異教的信仰が、表立つことなく執拗に、束縛なしに生き続けているのだ。民衆的な自然信仰、本能的汎神論^{ナチュラリスム}の遅い流れが、中世全体を、そしてルネサンス全体を貫流していることを、忘れてはなるまい⁸。(二宮敬訳)

魔術と混じりあった民衆文化——ミシュレが『フランス史』と『魔女』によって描き出した、悲惨でありながらも生命力にあふれた民衆世界の研究は、アナール第2世代のマンデルー、第3世代のドリュモーに継承されていく。ただし、これら現代の歴史家たちとミシュレとをつないだのがフェーヴルによるラブレール研究であったことは言うまでもない。

④身体、女性、自然

ミシュレの『魔女』(1862)が民衆文化の研究においてパイオニア的存在であったことは上に述べたとおりだが、民衆文化はミシュレにおいては心性と身体の双方から考察されている。魔術はキリスト教の異端であったばかりでなく、中世における医学、民間における医療でもあった。ミシュレは言っている。「ルネサンス期の偉大で力強い博士、パラケルススは、ラテン、ユダヤ、アラビアを問わず、すべての古代の医学の学識深い書物を焼き払った一方、民間の医学から以外、善良な女たち、羊飼いたち、死刑執行人たち以外から、何ひとつ学ばなかったと宣言している」(篠田浩一郎訳、岩波文庫、上巻、p. 178)。「魔女たちが行う最大の革命、中世の精神に反抗するさかさまの、最大の一步前進、それは、腹の、つまりさまざまの消化機能の名誉回復と呼ばれるべきものだ。……物質について研究することは、このときを境に、制限を取り除かれ、解放された。医学は可能となった」(p. 188)。

「身体」に対するまなざしは、ミシュレにおいては長いみちのりをくぐりぬけてようやく得られたものであった。少なくとも、初期の『世界史序説』(1831)のシェーマー——人間と自然、精神と物質の闘争——からは想像もできない変化である。青年ミシュレにとって自然、物質、身体、女性はすべて敵対的な存在だったのである。だが中期(『フランス革命史』)においては「民衆」が主役となり、晩年に至ってようやく、自然の中に生きるすべての存在に対してあふれるばかりの共感が寄せられる。身体も女性もあるがままのものとして受け容れられることになるのだが、『フランス史』(近代)における食物や病気に対するミシュレの描写はアナール学派に多くの研究素材を提供することになる(二宮宏之編『アナール論文選(2) 医と病い』新評論、1984)。

(3) マルク・ブロック

L・フェーヴルと並んで『アナール』の創立者の一人であったM・ブロック(1886-1944)についても触れておきたい。ドイツ占領と共にパリ大学を追われたブロック(ユダヤ系であった)は、レジスタンス活動に加わり、終戦直前に銃殺刑に処されるのだが、その間に書きためた歴史論(『歴史のための弁明』など)——*L'Histoire, la Guerre, la Résistance* (Gallimard, 2006)——にはミシュレが13ヶ所にわたって言及されている。ティエリ、ギゾー、あるいは少し後の時代の中世史家フュステル・ド・クーランジュと並んで紹介されている所もあるが、重要と思われるのは次の2点である(共に「現在」と「過去」という時間の観念に関わる)。

①現在と過去

我々は絶えず現在について語っている。……けれども、それに先立つ諸々の時代を認識することなしに、我々が生きている時代 (la moment du la durée) を理解することが可能であるかどうか知ることは、まさしくひとつの問題、きわめて重大な問題だ。

「現在を知るためには、まずそこに背を向けなければならない」と言っていたのは……職業的歴史家ではなく、それとは反対に何よりも永遠なるものの研究に専念していた社会学者のデュルケムであった。そして彼以前には、あの『民衆』という名の奇妙で深遠な本の中で、我々が偉大なるミシュレが書いていた。

「現在に、今あるものに追従しようとする者は、今が何であるかを理解することがないだろう」。この歴史家は、十分な知識をもたない一部の人々からは、ほとんどもっぱら過去のピトレスクでドラマチックな側面にのみ関心を持っていたと、勝手に誤解されていたのだ。「歴史に何を求めるのか」⁹。

L・フェーヴルとはちがって、地味な学究肌のブロックならではのミシュレ評である。「ピトレスクでドラマチックな側面」(事件史)ばかりがミシュレの本領ではない、社会学者デュルケムにも通じる時間の捉え方がある、つまり表面的な出来事の推移の根底には変わることはない、あるいは緩慢にしか変わらない時の流れ(集合記憶)がある、とブロックは言いたかったようである(彼はミシュレの『民衆』を挙げているが、トクヴィルの社会学的な作品はなぜか参照されてはいない。引用は1回だけである)。

②アンリ・ピレンヌのエピソード

これはブロックにおける「遡行的方法」(現在による過去の理解)にまつわるエピソードとしてよく引用されるものである。

ストックホルムに私はアンリ・ピレンヌと同行して行った。我々がそこに着くやいなや、彼は私に言った。「まず何を見ることにしようか。ま新しい市庁があるようだから、まずあれから始めようではないか」と。次に私が不思議に思うのを見越すかのように、彼は付け加えて言った。「もしも私が好古家であるならば、古いものにしか注意しないだろう。けれども私は歴史家である。だから、私は生活を愛する」と。生きているものを理解するこのような能力、これこそまさしく歴史家の優れた能力である。……我々のうちの最も偉大な人びとはみな……ミシュレに劣らず、この優れた能力をもっていた¹⁰。(鑽井鉄男訳)

「私は歴史家である。だから生活を愛している」というピレンヌの言葉は、むしろミシュレに

こそふさわしい言葉であろう。あまた存在する過去の偉大な歴史家たちの中で、ミシュレが今もなお現代の歴史家の模範となっているのは、人間としてのミシュレの魅力による所が大きいのではないか。彼は歴史家あるいは研究者である以前に、何よりも誠実な教師であった。この点に関して、自身の生活についてはむしろ寡黙であったブロックよりも、より情熱的な先輩のフェーヴルに語ってもらうことにしよう。ストラスブール大学からパリのエコール・ノルマルに戻ったフェーヴルは、100年前に同じエコール・ノルマルの教師であったミシュレの講義ノート（1914年にH・オゼールが刊行したもの）を読み、それを現在（1934年）の若きノルマリアンたちに伝えている。

1834年7月10日、まさにこの場〔エコール・ノルマル〕で行なわれた講義のノートがあります。……地方の町の王立中学校で教師としての辛い仕事待ち構えている青年たちを、ミシュレは激励していました。……ミシュレがその権威と、情熱のこもった言葉と、そして天才の光輝をもって試みたことを……私も諸君に対して試みようと思っているのです。……もし歴史家であり続けながらも自己の人生を全うするという自信を諸君に与えることができるならば、この時、本学に対する私の負債をいささかはお返しすることになるでしょう¹¹。（長谷川輝夫訳）

フェーヴルは現代——1930年代のヨーロッパのことであるが——を「危機」の時代、「人間精神の大いなる危機」の時代と捉えているが、それは学問が発達すると同時に専門化、細分化して、学者が全体的な展望を持たなくなっている時代である。それ故、若い歴史研究者に対してフェーヴルは次のような反語的な調子で提言をおこなうのだ。

歴史を研究するためには、決然と過去に背を向け、まず生きなさい。生活に没頭しなさい。……諸科学を、諸君の眼前でめくるめくような速さで変えている偉大な運動に目を閉じてはなりません。そればかりか実生活をも生きなさい。荒れ狂う海に生じていることを、岸辺から物憂げに眺めるだけで満足してはならない。難破しかけた船の中で、ぶるぶる震えて面目丸潰れのパニユルジュや、……天を仰いで助けを乞う、お人好しのパンタグリュエルであってはなりません。修道士ジャンのように腕まくりして、水夫が船を探るのを手伝いなさい¹²。（長谷川輝夫訳）

皮肉なことに、勇敢なる修道士ジャンの役割を引き受けたのは、フェーヴルより8才年下のブロックであった。1939年、53才になり6人の子持ちであったにもかかわらず、ブロックは予備役将校から現役に復し、ダンケルクの敗戦を目撃する。ナチスによって銃殺されるまでの4年間、歴史への考察をメモにつづりながらも、レジスタンスの活動を続けたのである。

ミシュレに戻るならば、彼はその歴史学だけでなく、その生き方によって後世の歴史家たちを魅了してきた。教育の自由を守るためにイエズス会と闘い、ルイ＝ナポレオンの独裁に抗議して職を失いながらも、ポーランドからの亡命者を支援し、プロイセンとの戦争を阻止するためにマルクスやルイ・ブランと連名で声明を出した。サルトル風に言えばengagementということになるだろうか。だがそれ故にまた、ミシュレの評価は政治の動きに左右されることにもなる。

2 ミシュレとフランス革命

(1) ソルボンヌ革命史講座

『フランス革命史』(1847-53)がミシュレの代表作であるかどうかはさておき、それはミシュレの最もよく知られた著書であり、ミシュレと言えばフランス革命を連想させる。

「ミシュレを読むまでは何人も革命の偉大さを感じず、テーヌを読まずしては革命の恐ろしさを感じることは出来ない」とアクトンは言っている（グーチ『十九世紀の歴史と歴史家たち』上、筑摩書房、1971、p. 239）。

文芸批評家として著名なテーヌには『現代フランスの起源』(1875-94)という大作があるが、テーヌによる革命批判に反論したのがソルボンヌ革命史講座の初代教授となるA・オラール(1849-1928)であり、彼はその就任講義(1886)において、科学的公平性を保ちながらフランス革命の政治的価値を擁護するという離れ技を演じている¹³。次の言葉は(革命史家の間では)よく知られている。

フランス革命に共感しない者は、その表面しか見ていない。それを理解するためには、それを愛さなければならない。(p. 16)

だがそのあとに、次のような言葉があることはあまり知られていない。

この愛なくしては、ミシュレの天才をもってしても、革命家たちの魂と革命の意味の洞察にたどり着けたであろうか？(p. 16)

ミシュレの著作は若者の愛国心を高める教本でもあった。

この歴史家の中には国民の魂が息づいていたと言える。若者が、その感動的な頁を読みながら、高邁な目的のために生きることを誓わないのであるならば、嘆かわしいことである。ミシュレの書物はフランスの学生のすべてにとって道徳心の一部となるべきであろう。(p. 37)

現在の生活と直接かかわることのない古代史や中世史と違い、フランス革命はミシュレにとっては同時代史であったし、第3共和政（1870-1940）の論客——王党主義のテーヌ、共和主義のオラル——にとっても現代史であったから、もともと「公平」「客観的」に論ずること自体が無理であった。歴史（革命）の評価は——例えば、政教分離の問題ひとつとってみても——個人の価値観や団体の利害と深くかかわっていたから、一方が正しいとみなすことも、他方から見れば誤った考えだということになる。ところが皮肉というかべきか、時代の風潮はロマン主義を去って実証主義・科学主義へと移行しつつあった。フランス革命史をとってみても、もはやコレージュ・ド・フランスのミシュレのように花形学者が高い所から市民に直接語りかける時代ではなく、古文書学校（École des chartes）出身の専門家が一次史料の分類をおこない、それをもとにしてソルボヌの研究者が学位論文を作成するという、現在もそうであるような研究スタイルが出来上がりつつあった。それが実証主義の歴史学であり、それがまた歴史の異端児であるL・フェーヴルの眼には我慢ならぬ閉鎖主義と映ったのである。

とはいえ、フランス革命史の歴史家たち（オラル、マチエ、G・ルフェーヴル）とアナールの創立者たち（L・フェーヴルとM・ブロック）との関係は悪くはなかったようだ。特にG・ルフェーヴルはストラスブール大学においてフェーヴルたちの同僚であったし、デュルケム社会学をフランス革命史に応用した論文「革命的群衆」は長らく心性史のお手本の存在であった。そして理論面ばかりでなく、共和主義的な愛国心においても、彼らが奉仕する第3共和政が存続する限り、フランス革命史は国民史（ナショナルヒストリー）であり、ミシュレはその輝かしい代弁者であり続けることができた。だが、第2次世界大戦後に「共和主義」が社会主義と自由主義とに分裂すると、ミシュレは主に後者から批判されるようになる。

（2）フランス革命は終わった？

風向きが変わったのは1980年代であった。

勿論、変化はそれ以前から生じていたはずなのだが、それが一気に表面化したのは、フランス革命200周年（1989）の企画が打ち出されたあの10年の間であった。まずミテラン大統領の登場（1981）という驚き、そして社会主義への期待があって、ほどなく期待は失望と幻滅にとってかわられる。1989年、パリで革命200周年が祝われている頃、世界の目はベルリンに向けられていた——「壁」の崩壊、そしてソ連邦の解体。皮肉なことに、200周年は「革命」の終焉を確認する機会となった。

だが早くから、こうした事態を予言していた歴史家がいた。F・フュレ（1927-97）である。「フランス革命は終わった」という彼の挑発的な発言は、当時フランスに留学していた筆者にとっても衝撃的であった。と同時に何かしら新鮮なものを感じたのもまた事実である。私を指導してくれていたM・ヴォヴェル（当時はエクス大学の教授で、後にソルボヌの教授となり、革命

200周年行事の委員長となる)はとても温厚な人なのだが、さすがにこの本(『フランス革命を考える』原著1978、邦訳1989)¹⁴⁾に対しては厳しい表情を隠さなかった。——« C'est une histoire conceptuelle. »(「概念史」あるいは「観念的な歴史」、つまりプロの仕事ではない、ということか?)

さてフュレによれば、19世紀的な「左翼」と「右翼」の対立はもはや消滅していて、フランス革命そのものは「国民的な伝統」になってしまっている。右か左かではなく、第三の道——自由主義?——を捜さなければならない。従って「革命」はもはやその歴史的使命を終えたのだとフュレは言う。マルクス主義的な歴史家たち(ソルボンヌに多い)はフュレを「修正主義者」と呼んで非難したが、フュレは彼らを「ジャコバン主義者」と呼び返した。かくして「修正主義」と「ジャコバン史学」との論争が繰り上げられたのである。

「論争」の細部についてはここでは立ち入らない。ただ、国民的伝統、アイデンティティとしてのフランス革命ということになれば、ミシュレに言及しない歴史家はいない。フランス革命やナショナリズムが批判されるとき、ミシュレもまた何らかの形で批判の対象とならざるをえない。ところで、左右の対立(19世紀)の一方を担った「右翼」(王党派とカトリシズム)は現代ではほとんど問題にならない。他方「左翼」(共和主義)は第3共和政(1870-1940)において支配的勢力となり、その正統的なイデオロギーとなった。フランス革命は「国民史」における起源として位置づけられ、公立学校において生徒たちに教えこまれた。明治以来の学校教育において古代の天皇神話が歴史として教えられたのと構図は同じである。ただし皇国史観が敗戦によって否定されてしまったのちがい、フランスの「革命神話」は大戦後もなお維持された。ドゴール將軍は貴族主義者であったかもしれないが、パリ解放の時にはラ・マルセイエーズを歌うことをためらったりはしなかったのである。このように「祖国」と不可分なものになってしまったことがフランス革命から逆にその「革命」的性格を奪うことになった。革命は変化を拒む「伝統」「制度」になってしまったのである。

20世紀のコンテクストで言うと、同じことはソ連をはじめとする社会主義国家でも深刻化していた。ボルシェヴィキの革命はプロレタリアートの解放を謳いながら、現実には共産党による一党独裁とスターリンによる苛酷な粛清を容認してしまった。にもかかわらずA・マチエやG・ルフェーヴルのようなフランス革命史家の本流は、フランス革命(ブルジョワ革命)がロシア革命(社会主義革命)によって完成されるものと期待していた。ロベスピエールの独裁とジャコバン派のテルールとは、確かにブルジョワ革命の限界を越えるものであったかもしれないが、それは新たな革命への実験として——その代償の大きさにもかかわらず——容認されていたのだ(「ジャコバン史学」)。だがスターリン批判(1956)の矛先はフランス革命にも跳ね返ってくる。

私がこの文章を書いているのは1977年晩春である。この時期には、ソヴィエト全体主義、……マルクス主義を標榜するいっさいの権力にたいする批判が左翼の考察の中心論題になっ

た。(大津真作訳、p. 21)

ソルジェニーツインの作品〔『収容所列島』1972-75〕が、ソヴィエトの経験を参照する際の歴史的な原点になった。(p. 22)

ロシアの例が、ブーメランのように、そのフランス的「起源」に打撃を加えに戻ってくるのは避けがたいことである。……本質を共有する二つの革命の断罪が反対に行われている。(p. 23)

フュレの主たる標的は当時ソルボンヌ革命史講座の教授で世界的に知られていたA・ソプール(1914-82)であったが、フュレの議論は学界的な論争を越えて史学史的にはミシュレとトクヴィルとの対比、思想史的にはルソーとモンテスキュー(あるいはロック)との対比にまで及んでいる。ただしフュレはミシュレを否定しているわけではない。ミシュレの類まれなる才能を十分に認めた上で、現代にはもっと別なタイプの歴史が必要だと言う。

私には大革命史家〔フランス革命の歴史家〕がミシュレかトクヴィルかの選択をこれまでしてきたし、今後も絶えずし続けていくように思えてならない。もちろんこのことは共和主義的なフランス革命史か保守的なフランス革命史かの選択を意味しない。……つまりミシュレは、大革命を内部から蘇らせようとする。ミシュレは大革命と一体化し、それを奉賀する。それにたいして、トクヴィルは、当事者の意図と彼らが演じている歴史上の役割とのあいだにはひらきがあるのではないかと考えており、たえずそれを問うてやまない。ミシュレは革命の透明性に腰を落ちつけ……一致を祝っている。トクヴィルは、……透明性や一致が人間行動とその現実的意味とのあいだにある最大限の不透明性を覆い隠している、と考えている。(p. 30-31)

ミシュレに関するフュレの言い分は公平であるように思われる。ミシュレを高く評価したエドモンド・ウィルソンもまた次のように書いている。「ミシュレの歴史への没頭ぶり、対象との一体化は並外れたものだ」(岡田正明訳『フィンランド駅へ』上、みすず書房、1999、p. 32)。ミシュレ自身がこのような一体化を意識していたことは、本人による「序文」(1869)からもわかる。「歴史と歴史家はこのまなざし〔感動した心の透視力〕の中に混ざりあってしまう。それは良いことだろうか、悪いことだろうか？」(邦訳『フランス史』I、p. 29)。

もっとも、中世から19世紀に至る『フランス史』の中で、ミシュレが常に対象と一体化できた訳ではない。一体化の例としてフュレが挙げているのは、『フランス革命史』の最初の部分(1847年に刊行された第2巻)における「連盟祭」の叙述である。これはミシュレ自身が「わが人生の最良の日」と言っていたように、歴史上の人間の意識と行動においても、また歴史への歴史家の共感においても、稀有な事例であった。だが1848年の2月革命とそれに続く権力闘争を目撃したあとで書かれた諸巻(第3巻、1850年以後)になると、「一体化」には困難がつきまとう。九月虐

殺（1792年）において囚人を殺害した民衆の行動をミシュレは肯定できないし、それを理解できたとも明言できない。彼はむしろ沈黙して事件の推移をひたすら叙述するのである（少なくとも筆者にはあの部分はそうとしか読むことができない）。晩年のミシュレはロベスピエールの独裁に対してははっきりと距離を置き批判的になるし、『革命史』の第2版（1868）に書き加えられた序文「専制君主」Le Tyranではむしろ断罪口調になっている。

そこにミシュレ的な「共感」の歴史学の弱点が存在するのかもしれない。そこでは歴史(history)が物語(story)化して、好感がもてる人物は善玉で、そうでない人物（ロベスピエール、ナポレオン）は悪玉として描かれる。他方、トクヴィル(1805-59)は常に対象との距離を保っている。『アメリカの民主主義』（1835-40）を書き、そうした生活スタイルを愛していたようには思われませんが、それでも彼はそうしたスタイルが未来のフランスのそれになることを予告している。『旧制度と大革命』（1856）の主役は絶対王制と革命政府であるが、貴族的な自由主義者トクヴィルにとってはどちらも自由の敵——中央集権——である。しかし批判の矛先は、抑圧的であることが自明な王権よりは、民主主義を標榜しながら国家の権限を拡大していく革命政府に向けられる（逆に王権の方は、実は意外にも進歩的であったという評価が下される）。言説と行動、意図する所と結果の落差——この逆説を解明することがトクヴィルの「社会学」——あるいは「概念史」——の課題なのである。トクヴィルは19世紀のフロイトであったのかもしれない。

われわれはトクヴィルと比較することで、ミシュレの歴史の弱点なるものを見た。しかしそれはフュレというフィルターを通して見たミシュレであり、本人の意志に反して第3共和政における「国民史」の歴史家たちの仲間に入れられてしまったミシュレなのである。

3 記憶の歴史

(1) 国民史の解体

修正主義（フュレ）とジャコバン史学（ソブール）の論争は、フランス革命史という一分野での現象であったが、これは、19世紀以来の実証主義史学に対する「新しい歴史学」（アナル学派）の挑戦という、より大きな——世界的な広がりのある——運動の中の1コマであったとも言える。この運動について語ることがここでの目的ではないが、その一例としてP・ノラ編『記憶の場』¹⁵をとりあげ、そこにおけるミシュレの位置づけを見ておきたい。

日本語版の監訳者である谷川稔によれば、P・ノラたち——つまり「新しい歴史学」の担い手たち——が標的とみなす「古い歴史学」の特徴は次の2点に要約される。

(1) 史料中心の実証主義（事実の歴史）

(2) フランス革命を起源とする国民史（ナショナリズム）

これに対してノラが企てる「記憶の場」の歴史はポリフォニック（多様）なフランス（les France）

を提示しようとしているのだが、それはむしろ実証主義以前のロマン派の歴史学——「一昨日の歴史学」——への先祖がえりのようにも見えるという（谷川、p.4）。

第3共和政以来の「国民史」が第2次大戦後のフランスで維持できなくなったことについては、前節（フュレ）でも触れたとおりであるが、P・ノラはその原因を「アイデンティティ」の崩壊だと言っている。歴史にはもはや連続性もなければ客観性もない。あるのは個人（主体）の記憶——それも断片化した痕跡のようなもの——でしかない。しかし、だからこそ、想像力をもった——ミシュレのような——個性的な歴史家の再現力が期待されるのだとノラは言う。つまり「歴史とは、……本物の小説をもたない時代のリアルな小説である」（1984年の序論「記憶と歴史のはざまに」邦訳第1巻、p.56）。

ノラの企画は、フランス革命200周年とは異なった意識の下に始められたものだが、これとは別のもうひとつの運動によって側面から支援された。それは1980年に始まった世界文化遺産の運動である。これは地域主義（régionalisme）あるいは地方分権（décentralisation）の運動とも連動するものであったが、パリではなく、地方から、下から始まった。これまで歴史や文化から「排除」されていた人々（労働者、地方の住民、女性……）が彼ら（彼女ら）の失われた伝統を復活させようとして立ち上がったのである（1992年の総括、「コメモラシオンの時代」邦訳第3巻）。ノラによれば、「記憶の場」の企画が受け入れられたのは「新しい歴史学」（社会史）の成功による所が大きい。なぜならそれは「記憶への門戸開放を、また歴史的なものから記憶的なものへの転換の一形態をまさに意味していたからだ」（p.454）。「過去はおのずとその内奥を明かすわけではない。事実の明白さの陰、当事者の言説や行為の背後、……資料の向こう〔側〕、こういったところでこそ、ミシュレの言う『歴史の沈黙』が語り出す。すなわち大多数の匿名性のうちで、また統計の示す反論の余地のなき、長期的な持続の重み、構造の規定力のうちでこそ語り出すのである」（p.455）。

おそらくはバルトやフーコーを意識しつつ、ノラは、何を書くか（題材）ではなく、いかに書くか（歴史家の意識や態度）が問題だと付け加える。

しかし、「いかに書くか？」とは必ずしも技術（技法）のありようのみを意味しない。むしろ、歴史を書いている「自分とは何か？」という問いを書き手につきつける。我々はここで再びミシュレに出会うことになる。

（2）ミシュレをどう読むか？

「歴史の沈黙」を前にして、歴史家はそれをいかに叙述できるのか？——「沈黙」が生じるのは、それを目撃した人がそれについて語る必要を感じなかったからかもしれないし、あるいは語るができなかったからかもしれない。前者の場合、その出来事は日常的で、平凡であるから、語るに値しないとみなされたわけである。これは歴史というよりは民俗学の対象であり、いわゆる

通過儀礼——誕生から死に至るまでの人生の諸段階を確認する慣行——などがその一例だが、他にも性愛、暴力、犯罪なども、大事件にならない限り、歴史がそれを書きとめることはなかった。第一節で触れた農民の世界が長らく「闇の世界」にとどまっていたのも同じ理由からである。反対に語ることがはばかられた、あるいは禁止されていたために「沈黙」のヴェールに覆われてしまう場合がある。王政復古期におけるフランス革命についての沈黙などもその典型的な例であろう。日常的な例としては「死」や「性」も一種のタブーとして語られなかった。あらゆる種類のアウトサイダー、宗教的・社会的・文化的なマイノリティ——異端、魔女、ユダヤ人、ジプシー、犯罪者、精神病者、同性愛者——の歴史が書かれるためには、アナール学派の登場を待たねばならなかった。

だが、ミシュレの『フランス史』全17巻に目を通し、その日本語版を編集した我々（大野・立川）は、ミシュレがそうした事例を決して見過ごしたりせず、それに多くの頁を費やしたことを知っている。教会や王国の歴史の傍らには、名もなき多くの男女の知られざる歴史がある。メジャーな歴史とマイナーな歴史のはざまで、どれをとり、どれを捨てるべきか判断に迷ったことは幾度もあったが、我々としては、現代におけるミシュレの存在意義は、むしろ後者（マイナーな歴史）へのまなざしにあったと信じている。

次に「いかに書くか？」という問いに関してであるが、とりあえずミシュレの『フランス史（中世）』（原著6巻、1833-47）から幾つかの例を挙げて考えてみたい。

歴史の研究においては、史料があっても、それをよく理解できないことがある。表面的には分かっているにもかかわらず出来事を把握できなかつたり、あるいは共感できなかつたりすることがある。要するに対象である歴史と主体である自分とが一体になれないということがある。『フランス史』や『革命史』のような大部の歴史書を読んでいると、所々、ミシュレもまた同じようなとまどいを感じていたのではないかと思わせる箇所に出会う。以下に幾つかの例を挙げる（原著と邦訳の巻数をローマ数字で示す）。

①「芸術の原理としての受難」（原著Ⅱ、邦訳Ⅰ）

邦訳『フランス史』では初版のテキストを使っているが、このテキストはフラマリオン社の全集版には載っていない（補遺として扱われている）。なぜそうなったかといえば、ミシュレは晩年になって若い頃のキリスト教賛美が気になり、これを削除してしまったからである。歴史家もまた人間であり、成長することもあれば、老いることもある。我々編者としては初版のテキストをよしとしてこれを採用したが、晩年のミシュレはこれを否定し、現代フランスの編者もそれを踏襲している。だが、決定的なテキストなどありうるのだろうか（邦訳『フランス史』Ⅱの編者解説を参照）。

②ランスの大聖堂（1869年の序文、邦訳Ⅰ）

大聖堂の鐘楼の下には、反乱を起こしたために刑に処された市民のリアルな姿が浮き彫りになっている、それを見たミシュレはショックを受けて中世史を続けることを断念し、フランス革命史の執筆にとりかかったという有名なエピソードである（p. 59-60）。だが、序文（1869）の言とおりに、このエピソードは『ルイ11世』（『フランス史』第6巻、1844）の少し前ということになるが、すでに第2巻（1833）の最終章でミシュレは短くこれについて触れている（1833年の日記にはもっと詳しい記述がある）。1833年—1844年—1869年という時の流れの中で、はじめはただ目にしただけであった「光景」の意味が少しずつ明らかになっていき、最後には決定的な「事件」として叙述されることになったのであろう。

③切断された手首、赤と青の頭巾——マルセルの反乱（原著Ⅲ、邦訳Ⅱ）

何気ない仕草や象徴が隠された真実・本質を語るという例であるが、役人を殺害した両替商ペランに対する見せしめの刑罰が14世紀のパリを震撼させた大反乱のきっかけとなった。

「王太子の家来たちは……ペランの手首を切った上で、彼を絞首刑にした」

「マルセルはパリの色である赤と青の頭巾を彼ら〔市民たち〕に被らせた」

上のようにミシュレが書いたとき、彼には仕草（手首を切る）と象徴（赤と青の頭巾）の意味がわかっていたのに違いないのだが、これは一種の心理学であって、歴史家が常に古い時代の文化的・心理的コードを理解しているとは限らない。前にも言ったとおり、その時代の人間にとって分かり切ったことは年代記作者もそれを説明しないし、それどころか当事者ですらその意味を解さないということがある。次に挙げるのは後者の場合であらう。

④シャルル6世時代の衣装（原著Ⅳ、邦訳Ⅱ）

「人々が恥じらいもなく身にまとったこの時代の奇怪な衣装——不道徳で幻想的な装い」

「12オーヌ〔約13メートル〕のガウンを引きずっている女装の男たち」

「獣姿の男たち」

「男たちの靴のつま先は……サソリの尾のようにとがっていた」

「女たちは、角をつけた巨大なエナン〔円錐帽〕を男たちの頭の上につきたてていた」

フランス王国は当時ヨーロッパ随一の栄華を誇っていた（シャルル6世即位当初）。華美な服装は当然のこととして宮廷の祝宴で受け入れられたのであろうが、それが精神の無秩序に由来するものとは当時は誰も思わなかった。だがそれはまもなくやってくる国王シャルル6世の発狂の予兆であったのである。

⑤オルレアン公の暗殺（原著Ⅳ、邦訳Ⅱ）

④の例は、歴史家（ミシュレ）が記号（奇怪な衣装）の意味をよく理解していて、シャルル6世の発狂の原因を説明する道具として使ったものだが、この事例については解説（謎解き）なしに投げ出されている感じがする。

シャルル6世の弟オルレアン公は兄シャルルが発狂したために摂政の職にあったが、王妃イザボーとも関係をもっていた。11月23日の夜、彼はその愛人の館にいた。そこに王からの使いが来て会いたいと言う。「まだ8時にしかなっていなかった。……この辺鄙な場所〔マレー区〕で、しかも11月には遅い時刻だった」。彼は数名の家来だけを伴って、夜の街区に出て行く。「公はダマスク織のマントをまとい、家臣を先に立たせて旧テンプル通りを進んだ。陽気であろうとする人らしく、低い声で歌い、手袋を弄んでいた」。

歴史家も読者も、この直後にオルレアン公が待ち伏せていたブルゴーニュ公の刺客によって殺されることを予知している。政治的に見るなら、この暗殺事件によってフランスがブルゴーニュ派とオルレアン派に分裂し、その弱体化によってアザンクールの戦（1414年）に敗れ、更に15年後にはジャンヌ・ダルクが現れてフランスを救うという流れになるのだが、ミシュレはなぜあれほどまでに事細かくオルレアン公の悲劇を叙述したのだろうか。パリ生まれのミシュレは事件の舞台となったマレー地区の街路や建物を知りつくしており——勿論14世紀のパリと19世紀のパリは同じではなかっただろうが——我々はミシュレの叙述をもとにしてこの事件を空間的にも再現することができる。だが物理的に知ることが可能であるとしても、私がおぼろげに感じつつも完全には理解できなかったのは、夜のバリの暗さにも似たオルレアン公の心の中の闇である。

これは第3巻（1837）のフィリップ4世やマルセルには感じられなかったことである（彼らは国家や階級の象徴であって、個人ではなかった）。第4巻（1840）のシャルル6世あたりから変化が生ずる。そして国王の弟であったオルレアン公は、摂政であったためというよりは、むしろ死ぬことによって「たった一人の存在」「かけがえのない個人」に生まれかわるのである。

⑥ジャンヌ・ダルク

この題材については多くの文献、多くの解釈があるので、ここでは簡単に触れるにとどめる。先に述べたシャルル6世、オルレアン公の流れの中で、ミシュレにはジャンヌの内面にまで入り込んでいく心の用意ができていた。ジャンヌは明らかに「個性的」な女性（少女）として描かれており、もはや古いタイプの聖女ではない。だから、ジャンヌの歴史をひとつの小説のように読むこともできる。しかし同時に、彼女の生まれ育ったロレーヌ地方の歴史、ドンレミ村における農民の生活——そして心性——がとても丁寧に書かれているので、それはやはり一つの歴史としても読むことができる。ジャンヌは個人であるとともに集合的な存在、フランス農民の典型でもある。ジャンヌ・ダルクの場合、文学性と歴史性のバランスがとてもよくとれているので、読者

はそれを自分の好みや関心に合わせて読みことができる。だが、これはミシュレにとっては例外的な成功だったのではないだろうか？

4 ミシュレの現代性 (modernité)

結びにかえて、ロラン・バルトとジャック・ル・ゴフのミシュレ評をとりあげておきたい。

バルトは彼の『ミシュレ』(1954)の最後の所で次のように言っている。「彼はおそらく、不可能な言葉で歌うことしかできない近代 (modernité) の作家たちの最初であった¹⁶」。

ミシュレの場合、「不可能な言語」とは民衆の言語であったが、これは語ろうとしても語ることができなかつたとミシュレ自身が告白している。「その言語、民衆の言語はついに私を寄せつけなかつた。民衆にその言語を語らせることが私には出来なかつたのである」(藤本治訳、p. 252)。

だがミシュレが語ろうとしたのは、民衆の言語だけだっただろうか。若い頃には、神の言語、教会の言語、騎士の言語を語ろうとしたし、その後、変化が生じて農民の言語、動物の言語を語ろうとした。その他、異端の言語、魔女の言語、女、海、山……と数え上げていけばきりが無い。ミシュレという主体は、いつしかその対象と一体となり、対象それ自体が一人歩きをしはじめる。デカルト的なエゴ——近代的自我——はミシュレという歴史家には存在しないのかもしれない。彼自身、歴史家が歴史を作るのではなく、歴史が歴史家を作るのだと言っている(1869年の序文、邦訳Ⅰ、p. 29)。この極端な多重人格——この上なく自己中心的でありながら、ほとんど限りなく博愛主義的でもある——こそミシュレの本質であり、P・ノラのいうポリフォニックなフランス Les France のあり方なのではないか？

ベシズムに陥るのではなく、modernité (近代性もしくは現代性) の肯定的な側面に目を向けることにしたい。ル・ゴフはバルトの言葉を引用しながら、ボードレールやミシュレを念頭に置いて次のように書き加えている。「近代性はここでは境界の侵犯、周縁性における冒険であり、もはや……規範への順応、権威への逃避、中心への集合ではない」(『歴史と記憶』p. 76)¹⁷。

われわれは、ル・ゴフのコメントによって、フランスの歴史学におけるミシュレの位置を改めて確認することができる。後半の部分(規範への順応……)は、第3共和政下の御用学問となった国民史の特徴であり、P・ノラによる攻撃の標的となったものである。ル・ゴフがそのあとで引用するアンリ・ルフェーヴルの定式 (*Introduction à la modernité*, 1962) も参考になるので挙げておこう。「近代性 (modernité) は近代主義 (modernisme) とは異なっている。……確信的で尊大な傾向は近代主義に対応する。……問いかけと批判的な考察を伴う傾向は近代性に対応する。これら二つは不可分なもので、近代世界の二つの側面である」(ル・ゴフ、p. 77)。

ボードレールの詩が、ユゴーの詩と同じように「国民詩」になりうるものか筆者には判断がつか

かないが、ミシュレの歴史は明らかに「国民史」と言えるようなものではない。サタンは自由の別名だ、などとうそぶく歴史（『世界史序説』）がどうして国民史になりえよう。それは永遠に国家（*cit *）の外にとどまり続けた異端児の歴史であり、またそういう人々のために書かれた歴史なのである。

註

1 近年になってL・フェヴルとM・ブロックの論文集が新たな編者たちによって刊行された。

L. Febvre, *Vivre l'histoire*,  dition  tablie par Brigitte Mazon et pr fac e par Bertrand M ller, Robert Laffont/Armand Colin, 2009.

M. Bloch, *L'Histoire, la Guerre, la R sistance*,  dition  tablie par Annette Becker et  tienne Bloch, Gallimard, 2006.

ともに地味な装訂のペーパーバックではあるが、それぞれ1000頁を越す大冊で、現在では入手困難な書評や小論も収録されており、索引も付いている。筆者はこの索引を手がかりに、2人の歴史家のミシュレに対する評価について検証してみた。ただし引用にあたっては、邦訳がある場合はそちらを採用し、訳者の名と訳書の頁を（ ）で示した（以下、他の文献についても同様の表記法をとっている）。

また、ミシュレについては日本語版『フランス史』全6巻（大野一道・立川孝一監修、藤原書店、2010-11）の刊行が終了した。ただし、これは抄訳で、原著は『フランス史』（17巻）と『19世紀史』（3巻）の計20巻である。念のために、邦訳と原著との対応関係を示しておく。

邦訳『フランス史』I（中世上）	原著『フランス史』序文（1869）
	1巻（1833）
	2巻（1833）
II（中世下）	3巻（1837）
	4巻（1840）
	5巻（1841）
	6巻（1844）
III（16世紀）	7巻（1855）ルネサンス
	8巻（1855）宗教改革
	9巻（1856）
	10巻（1856）
IV（17世紀）	11巻（1857）
	12巻（1858）
	13巻（1860）

- 14巻 (1862)
- V (18世紀) 15巻 (1863)
- 16巻 (1866)
- 17巻 (1867)
- VI (19世紀) 『19世紀史』 1巻 (1872)
- 2巻 (1875)
- 3巻 (1875)
- 2 L. Febvre, *Michelet*, Les classiques de la liberté, Édition des Trois Collines, Genève-Paris, 1946.
フェーヴルの序文の邦訳は以下に収録。J・ミシュレ『世界史入門——ヴィーコから「アナール」へ——』大野一道編訳、藤原書店、1993年。
- 3 L. Febvre, *Michelet et la Renaissance*, Flammarion, 1992 (石川美子訳『ミシュレとルネサンス』藤原書店、1996年)。
- 4 L. Febvre, *La Terre et l'évolution humaine*, 1922 (飯場浩二訳『大地と人類の進化』上、岩波文庫、1971年)。
- 5 共に邦訳『フランス史』Iに収録。
- 6 L. Febvre, *Vivre l'histoire*, p. 28 (長谷川輝夫訳『歴史のための闘い』創文社、1981年、p. 37)。
- 7 *Ibid.*, p. 752, et p. 763 (二宮敬訳『フランス・ルネサンスの文明』創文社、1981年、p. 7とp. 29)。
- 8 *Ibid.*, p. 800 - 801 (二宮敬訳、p. 111 - 113)。
- 9 M. Bloch, *L'Histoire, la Guerre, la Résistance*, p. 480。
- 10 *Ibid.*, p. 879 (鑽井鉄男訳『歴史のための弁明』岩波書店、1956年、p. 25 - 26)。
- 11 L. Febvre, p. 25 (長谷川輝夫訳『歴史のための闘い』p. 30 - 31)。
- 12 *Ibid.*, p. 33 - 34 (長谷川輝夫訳、p. 46)。
- 13 A. Aulard, 《Leçon d'ouverture du cours d'histoire de la Révolution française à la Faculté des lettres de Paris》, *Études et Leçons sur la Révolution française*, Première série, Troisième édition, Paris, Flix Alcan, 1901。
- 14 F. Furet, *Penser la Révolution française*, Gallimard, 1978 (大津真作訳『フランス革命を考える』岩波書店、1989年)。
- 15 P. Norra (sous la direction de), *Lieux de Mémoire*, 7 vols., Gallimard, 1984 - 92 (谷川稔監訳『記憶の場』3巻、岩波書店、2002 - 03年)。
- 16 R. Barthes, *Michelet*, Seuil, 1954, p. 161 (藤本治訳『ミシュレ』みすず書房、1974年、p. 235)。
- 17 J. Le Goff, *Histoire et Mémoire*, Gallimard, 1988, p. 89 (立川孝一訳『歴史と記憶』法政大学出版局、1999年、p. 76)。